

腫瘍内科

診療科目：腫瘍内科

診療科担当研修責任者名：西條 康夫（腫瘍内科教授）
診療科連絡先担当者名：森山 雅人（腫瘍内科総括医長）

連絡先：oncology@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：27年度：2人。28年度：0人。29年度：0人。30年度：1人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：1人

◆◆◆ 学会認定専門医数 ◆◆◆

がん薬物療法専門医3人、呼吸器学会専門医1人、血液専門医1人、総合内科専門医2人、臨床検査専門医1人

◆◆◆ 学会認定指導医数 ◆◆◆

がん薬物療法指導医1人、呼吸器学会指導医1人、血液学会指導医1人、内科学会指導医2人

◆◆◆ 学会専門医修練施設としての認定 ◆◆◆

日本臨床腫瘍学会認定施設

診療科の概説・特徴

当診療科は2012年11月に誕生した新しい診療科です。従来、臓器別診療の中で行われてきた「がん薬物療法」を臓器横断的に行います。進歩の著しい分子標的治療薬も取り入れ、様々ながんに対する薬物療法を実践する腫瘍内科の研修を行っています。

診療科研修の特徴等

本プログラムは内科学、特に腫瘍内科学の研修を希望する医師を対象としたものです。研修内容は、主な悪性腫瘍である消化器悪性腫瘍、胸部悪性腫瘍、および乳腺腫瘍等について、基本的な知識や診察法、検査所見の考え方などを習得し、がん薬物療法の基礎を理解することを目的としています。また、悪性腫瘍患者および家族の心理や背景を把握し、緩和治療の基本を習得することも目的としています。腫瘍内科研修を通じて、悪性腫瘍患者の全人的な診療が可能となるよう養成します。

精神科

診療科目：一般精神科、心療科、児童精神科、リエゾン精神科、老年精神科

診療科担当研修責任者名：染矢 俊幸（精神科教授）
診療科連絡先担当者名：横山 裕一（臨床研修実施専門委員）

連絡先：yokoyama@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：16年度：44人。17年度：47人。18年度：14人。19年度：17人。20年度：15人。21年度：24人。22年度：24人。23年度：10人。24年度：3人。25年度：4人。26年度：8人。27年度：9人。28年度：13人。29年度：18人。30年度：25人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：5人以内

◆◆◆ 学会認定専門医数 ◆◆◆

日本精神神経学会専門医24人、日本臨床精神神経薬理学会専門医6人、日本総合病院精神医学会専門医1人、日本小児精神神経学会認定医3人、日本臨床薬理学会認定医1人、日本認知症学会専門医1人、日本児童青年精神医学会認定医1人、こどものこころ専門医1人

◆◆◆ 学会認定指導医数 ◆◆◆

日本精神神経学会指導医20人、日本臨床精神神経薬理学会指導医4人、日本臨床薬理学会指導医1人、日本総合病院精神医学会指導医1人、日本認知症学会指導医1人

◆◆◆ 学会専門医修練施設としての認定 ◆◆◆

日本精神神経学会認定施設、日本臨床精神神経薬理学会認定施設、日本総合病院精神医学会認定施設

診療科の概説・特徴

最新の国際的診断基準の導入や、エビデンスに基づいた診療など、優れた精神科臨床の実践を目指している。最近では、うつ病の増加、児童の心の問題、認知症の増加など、精神医療のニーズが非常に高まっており、当科では、こうした様々な疾患に十分対応できる臨床医の育成に取り組んでいる。診断学と治療学は臨床で、最も大切な技能であり、指導医はこうした技術を十分に習得できるよう努力している。今後爆発的な需要が見込まれる児童思春期精神医学についても、専門医を養成するため、国内の専門機関との人材交流などのプログラムを用意している。活発な臨床活動から生じる様々な疑問を解決しようとする姿勢を重視し、約10領域の臨床研究グループが、新しい知見を国内外に精力的に発表している。

診療科研修の特徴等

午前中は主に外来、午後からは入院研修を行う。外来研修では、最初に新患者の予診を行い、その後診断学について専門的教育を受けた上級医師と共に診察を行った上で、診断及び治療方針を確定する。当科研修中は毎日これを繰り返すことで、診断学について習熟できる。

入院研修ではプライマリケアで扱うことの多いうつ病、不安障害、認知症、意識障害（せん妄）や統合失調症を中心に3症例以上を担当する。研修医は2～3人で構成される主治医グループの一員として診察にあたり、主治医グループ全員参加による週1回のグループ回診、及び毎週火曜日に行われる医師全員参加による検討会に参加する。検討会では、詳細な総括を作成し、新入院患者全員に対して面接を行い、診断及び治療方針について活発な議論を行う。更に入院中の患者全員についても毎週ショートプレゼンテーションを行うため、全医師が全患者の情報を共有し、グループ以外の医師からも多くの助言を得られる。

症例検討会では診断に悩む症例や治療困難症例などについて文献的考察を行った上で活発な議論が交わされる。時季が合えば上級医に帯同して全国規模の学会やセミナーに参加することができる。